

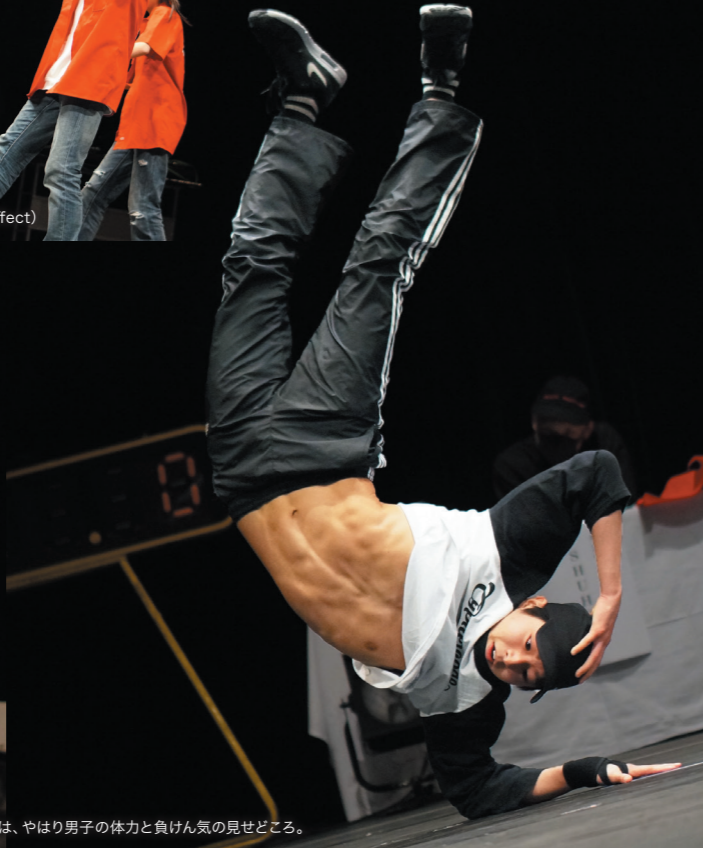
闘舞

ダンス部の新たな可能性
「バトル」「ブレイク」「男子部員」

文 石原久佳 (本誌編集長)



キレキレのフットワーク
を見せた元石川高校の女
性ブレイカー。



ブレイクダンスのパワームーブは、やはり男子の体力と負けん気の見せどころ。



大会三連覇を果たした二松学園大学付属高校 (Butterfly Effect)



ブレイクダンスのパワームーブは、やはり男子の体力と負けん気の見せどころ。



男子校である熊谷高校ダンス愛好会 (詳細記事はP6)。活動のしやすさを考慮して男子ダンス部を作る学校もある。



チームバトルでは、ソロのアドリブだけでなく、ルーティーンや組み技などのチームプレイも勝利のポイントだ。

昨年末に日本のストリートダンス界では歴史的快挙と言えるニュースが飛び込んできた。

ブレイクダンサー「BOY SEGI」がブレイクダンス世界大会で優勝！

キッズ時代から活躍してきた福岡出身の堀吉成が、世界大規模のブレイクダンス「One Battle」で「Red Bull BC One」にて、日本人として初の優勝を果たした。国内第一人者だった先輩格の「MAM」がどうしても届かなかった世界ナンバーワンの座を19歳にして手にしたのだ。

時期を同じくして、もうひとつ大きなトピックが、2018年にブエノスアイレスで開催されるユースオリンピックにて、「ダンススポーツ」がプログラムに加わることで発表され、そこではブレイクダンスの男女混合チームによるバトルが行なわれるという。

これは、ブレイクダンスとダンスバトルが初めて競技として認められた第一歩と言える出来事であって、その強豪国として日本の若手ダンサー達にはより大きな注目が集まることだろう。約40年前に輸入されてきたストリートダンス文化の日本での独自発展ぶりを、世界各国へ逆アピールしていく時代に突入してきたとも言える。

どんな分野においても、目指す頂点が高ければ高いほど、その裾野は大きく広がっていくもの。高校ダンス部界においても、その流れに従って今後ブレイクダンスやバトルはよりポピュラーになり、それに伴って男子部員が増加していくことが見込まれる。振り付け作品での活動が中心のこれまでのダンス部界の傾向とはカウントー(反動)となる動きがここ数年で目立ってくるのではないだろうか。

筆者は以前にキッズダンス雑誌の編集長をやっていたのだが、10年前キッズが盛り上がり始めた当初は、先生に振り付けられたコンテスト作品を競い合うことが中心で、応用力のないキッズにはバトルは無理だと思われていた。しかし、いざ蓋を開けてみるとキッズ達は器用にバトルをこなし、中には大人のダンサーを負かすほどのスパーキッズも次々に現われた。バトルに対する集中力や純粋さ、高度な技を小さな体で踊りこなすインパクトがキッズ達をバトルに順応させたわけだが、この変遷は今後、振り付け作品中心の高校ダンス部にも同じように起こり得ることだと予想する。

じっくりと作り込んでいく面白さのステージ作品に対して、ダンスバトルは一旦自分の殻を破ってしまえば、ダンサーとしての新しい刺激と快感を得ることができ。そこで必要となるのは即興性や対応力「アドリブ力」だ。その能力育成は現代の教育的意義ともシンクロしていく部分があるのではないだろうか。

これからの社会を生き抜くためには、知識だけではなく、それを使いこなす「知恵」が重要。得てきた情報やスキルを、臨機応変にスピーディにリスミカルに使いこなす「アドリブ力」は、ダンスではバトルの現場にこそ発見と発展があるのであって、ダンスバトルがスポーツ競技として認められた所以もそこにあると言えるだろう。

そういった変化の兆しを象徴するような大会が昨年の暮れに行なわれた。日本

DANSTREET

>>日本高校ダンス部選手権(ダンススタジアム)バトル大会の全バトルレポートがDANSTREET(danstreet.jp)にアップされています。